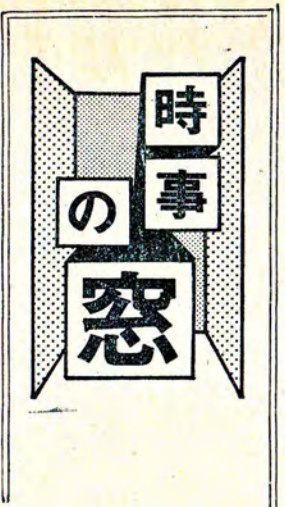


ロッキードが仕かない間
にほとんどミグ25。ソ連はひ
たすら「飛行機」と言うだけ
で、ミグ25とは一度も発表し
ていないのだそう。その飛
行機も分析してみると天した
代物ではないかと思える。
いこの見方
がある。逆
に西側の技
術を盗み取
戻したのではないかとさえ言
われているのだから、機体そ
のものは「期待」はずれかも
知れない。だが、調査の狙い
はソ連の軍事水準はもとより
「敵い」に関する基本的な考
え方を分析することにある。
加えてアメリカには生きた証
人さえいるのだから、ソ連軍
がほぼ全面的に解明されるか
も知れない。やはりソ連のシ
ョックは大いだろう。あれ
は強制降参させられたものだ
である。
一方、日本のシヨックも本
来なら大変なものであるはず
だ。なにしろ外国の戦闘機が
(それも略
に仮想敵国
として
あるいは亡命の意は多くな
かった等々、世界に向って声
を大にしても自由主義國から
は一向に信用されない。なる
ほど、その丘でゆけば日本に
遺憾の意を表明する必要もな
く、漁船の兵捕も当然の報復

現代

「ミグ 25」

処置と言ふことになる。日本
の世論がますますソ連を理解
出来なくなるのも無理ない話
である。
天下泰平とはこのことであ
る。機体など「陣脚」がある
まで返すべきではないし、ソ
連だって「穴」をくられた機体
などどうでもよからう。真意
はこの一事を北方領土、露
参、漁業などともに日ソ間
を有利に運びたいだけだ。こ
れらの問題は、逆に日本が取
引材料にすべきものであつ
た。ところがミグ25の問題に
は、日米安保と言う重大な要
素が横たわっている。ソ連が
これ以上の処置に出れないの
も、何よりも日本が泰平とい
られるのも安保の密在の努力
によるものだ。(瀧)



☆☆☆ 注目の国慶節

毛沢東の死からはや一カ月に
なるとうしている。毛沢東死後
の中国が、どのような後継リ
ーダーシップを形成し得るかとい
う点で内外の注目を集めていた
十月一日の國慶節は、天安門樓
上での異例の座談形式による党
中央および各界代表の集会にお
わった。多くの新聞報道は、服
喪期間中のための当然の措置と
みなしていたけれども、できれ
ば毛沢東なきあの党主席座任
間題をはじめ康生、周恩来、朱

德らと相次いだ指導者の死や鄧
小平失脚にともなう政治局の空
白(政治局常務委員会は当初の
九名が四名になってしまつてい
る)を埋めて、中国の新たな旅
立ちをこの國慶節を機に果たし
たいとつづつあつただけに、や
はり、これらの後継リーダーシ
ップの布陣をめぐって中国は大
きな困難に直面しているのだと
見なければならぬ。そのよう
な折しも、たゞ今は『ワシント
ン・ポスト』(九月三十日付)
のシェン・マッシュヌア香港特派
員が伝えているように、中国各
地ではよくも不穏な情勢が目立
っているとの報道があつたが、
このような報道についてはさて
おいても、例年、國慶節に
発表されてきた『人民日報』・
『紅旗』・『解放軍報』の三紙
誌共同社説が発表されず、『人
民日報』単独の社説「毛沢東思
想を習し遺志を受けつづけ」
だけであつたことも見方によつ
てはよくも党と軍とのあいだ
に深刻な問題が出はじめてい
ることを示唆しているといえよう

毛沢東なき中国の試練

東京外語大助教授 中 嶋 嶺 雄



集中していた権力は、いわゆる
道德的強制力としてのカリスマ
性をもふくめてあまりにも強大
であつたのみならず、現行の党
規約(七三年の十中全会で採択)
と憲法(七五年の第四期全国人
民代表大会で採択)によって法
制的にも、圧倒的なものであつ
た。そして、いわゆる「二元化
指導」の原則に基づいて、党主
席には党・政軍の三権が全面的
的に集中するような権力のシス
テムを中国は形成してきただけ
に、後継者問題には絶大な重要性
と同時に深刻な困難を有するの
である。人は一般に、華國鋒・
葉群一副主席を中心とする集団
指導制といふけれども、問題は
決して簡単ではない。

まず第一に、党主席の地位が
右のように圧倒的なものであり
その地位は毛沢東のみならず許
されたものであるだけに、そ
の地位をそのまま他のリーダー
が継承し得るかどうかが重要な
問題がある。かりに華國鋒が党主
席になれば、当然、國務院首相
もその下で兼務するであろうから

このように見ると、國慶
節までに後継リーダーの布陣を
固め得なかつた中国の困難が明
らかになる。こうした困難の
なかで当面の華國鋒指導部は、
いわゆる文革派と実務派とのパ
ランサーとして存在してゆかざ
るを得ないであろうが、このよ
うなパランサーとしての地位が
固まり、「新実務派」になり得
るかどうかがさしあつたので大
きな課題であろう。この場合注
目すべきことは文革派の中心、
いわゆる上海グループ(江青、
張春橋、王洪文、姚文元)のな
かから張春橋がその実務感覚と
政治的リリズムによって、「新
実務派」に移行するのではない
かと思われることであり、文革
派内部での張春橋と姚文元との
対立なども感じられるだけに、
張春橋の立場が当面のキー・ポ
イントであろう。一方、軍の動
きであるが、葉劍英(国防相兼
副副主席)、劉伯承(党中央軍
事委副主席)といった軍の長老
は、もともと前者が周恩来、後
者が鄧小平と近かつたし、中国
の重要な地域を握る実力派軍人
三弱兵といわれる陳錫聯・北
京軍区司令、許世友・広州軍区
司令、李德生・瀋陽軍区司令は

激動と混乱

そのようなことになれば、毛沢
東と周恩来を一緒にしたような
権力の座に形式上はつくことに
なる。こう考えただけでも問題
は簡単ではない。第二には、い
わゆる集団指導制が中国にふさ
わしいかどうか、という問題で
ある。この点では社会主義國に
おいて、集団指導制が長期安定
的に機能した前例がない(スタ
ーリン死後のソ連、フルシチョ
フ失脚後のソ連をさしあつた想
い起せばよい)だけではない、
中国の政治風土からして、歴史
的にも集団指導制はなじみない
ものであつた。そのうえ、すで
に述べたように、現行の中国の
権力システムは、それを制度的
に改めないかぎり、そもそも集
団指導制とはまったく異質の、
党主席絶対の権力構造を内在し
ているのである。



☆☆☆ 後継者問題

ともかく、いま毛沢東主席に



文化大革命進行当時の毛沢東 (1967年)

の、或いは宗教生活上の重要な言葉の深い意味が自らと理解出来、興味の尽きることがない。本書を読まれた方はごなため、日本人と生まれ、日本語を有することの喜びと誇りをしみじみと感ずることであろう。一読をおすすめする所以である。

(文化局・磯部和男)

れる軍の動向に注目しているようである。

☆☆☆ 日本の進路

☆☆☆

このような方向が実を結び、中ソ関係が改善されるものがないという可能性があるのがアメリカにとっては大きな脅威であり(基本的には日本にとっても同様であろう)、中ソ接近はアメリカにとっての最大の悪夢であるだけに、アメリカとしては今後、さぞに米中接近を促進するであろう。中国の軍の動向にたいしてアメリカが一定の軍事的支援をえおこなうかねないことを、今回のシユレジンジャー前米国国防長官の訪中は不慮としていたのである。

こうして、毛沢東なき中国をめぐる国際政治の壮大なゲームはすでに開始されている。そうした状況のなかで日本はいまなにをなすべきか。日中関係、日ソ関係に問題が山積している折だけに、醜い政權劇を早急に閉幕して、真剣に対処してゆかねばならない。

任させているだけに、もじもじならかの問題がこられて中国を大きく揺さぶったとき、中国内政の激動と混乱は避けられないであろう。

☆☆☆

中ソ関係

☆☆☆

このような内政上の混乱をい

ともに表徴派の重鎮、李先念(副首相と同じ湖北省黄安県出身で、上海グループ同様の湖北貴安グループともいえる開族集団を形成して全体的には文革派と大きく離れた立場にある)中国の内政は、過去一年大きく揺れ動いてきただけではなく、今日でもこのような内政を脅かす

私は安らぎを与えられは人生に対する思考をににつけるものがある。

「を」を見る

ついでに、肉親の死父も母も幼い頃失くし

耐えていたが、時おり、新幹線の中などで、空きあがるように、悲しみに溺りきれないでいる自分を家内に対してすまないと考えた。自分の中にどうしても、悲しみが湧いて来ないのだった。そうした思いは、義母は私を見て、倒れるやうに悲にしがみついていた。そうした義母を抱きながら、私は義母に対してすまないと思つて、義母は首つ

ついでに、肉親の死父も母も幼い頃失くし

つの子として、毛沢東以後の中国を外から揺さぶろうとしているのがソ連である。ソ連としては、中ソ対立の「元凶」と見なす毛沢東の死を一大転機として、最大限目標としての中国内政の親ソ政權形成、最低限目標としての中ソ関係の一定の改善という基本戦略のうえに、当面の中国が毛沢東路線からの逸脱をおそれるような対ソ姿勢を崩さなければならぬと十分に読みこんだうえで、二三年間からのあつた硬軟両論の対中接近対中工作を執地に試みるであろう。毛沢東死後のソ連の出方のなかには、すでに多くの変化があらわれている。とくにソ連としては、後継リーダーのなかで薄ソ経験もあり、かつてはソ連知識論を書いたこともある張春橋に期待しているようであり、同時に、これ以上の対ソ対決をおそ